1 研究テーマ

「自画像をテーマとした鑑賞の授業による連携の工夫

～中学生と高校生とが連携して学び合う鑑賞授業の実践～」

2 テーマ設定の意図

幼少の頃から小・中・高校生、そして大人になるまで、自分と向き合い、描くことのできる題材として「自画像」という共通のテーマを選び、中学生が描く自画像に高校生（美術科2年生）がアシスタントティーチャーとして関わるという鑑賞の授業を計画した。中学生にとっては、自分たちよりも数歳上の先輩から、自画像について学ぶ機会となり、同時に高校生が教師のアシスタントとなって中学生の前で語っていくことは、実は高校生にとっても何らかの学ぶ機会となるのではないだろうか。こうした観点から、中高生の学び合いとなる連携の工夫を試みた授業展開を図りたいと考えた。

3 調査研究の内容

(1) 中学生「自画像」の美術科設置高校(以下拠点校と称す。)の文化祭「小中高合同作品展」への参加を通して、授業での自画像制作を2年生の2学期始めに設定したので、夏休みに美術部生徒が自画像制作に取り組んだ。研究授業に向けての事前の取組として位置づけられるが、同校の文化祭「小中高合同作品展」へ出品させていただき、後日、同校の授業において鑑賞会実施の上、作品へのコメントをいただいた。10月に実施する「異校種間の連携の工夫」に関する研究授業の機会に、出品した本校美術部生徒と高校生との交流の機会を持つ。

(2) 高校生がアシスタントティーチャーとなる中学生の鑑賞の授業の構想を通して

ア 中学生にとって、高校生がアシスタントティーチャーとなることの意味

中学2年生という子どもから大人への過渡期にある生徒にとって、高校生というのは数歳上の「生き方」・「学び方」における先輩（あるいはお手本、目標）と位置づけられるのではないか。美術専門学科に学ぶ高校生は、中学2年生にとって、まさに自らの生き方と関連付けながら、美術を学び続けている先輩として映ると思われる。

イ 高校生を中心とした中学生小グループの鑑賞会の実施

学級を3つに分け、11人の小グループに高校生が2人ずつアシスタントティーチャーとして入るようにする。事前に作品を見ていないので、高校生にとっても中学生の作品に即座にコメントを入れるのは難しい作業となるが、中学生にとっては先輩としての高校生のリードは自分の作品について語りやすい雰囲気となり、自己の内面を掘り起こせるのではないか。そのように中学生にとって自分の作品について語りやすくなるのが、むしろ高校生にとってもコメントしやすい雰囲気となり、作品の鑑賞を深めていくものと思われる。

事前に教師と高校生とで授業前に打ち合わせを行うものの、授業ではアシスタントティーチャーとはいえ、小グループでは高校生が主体となって進行する。

また、高校生が描いた自画像作品も中学生に見せる機会も設けていく。

(3) 鑑賞授業後のアンケート実施による中学生と高校生の学び（成果）について

授業後に、中学生と高校生に同じ項目でアンケートを実施する。アンケートのねらいは以下の2点についてである。

- ・ 高校生をアシスタントティーチャーとする中学校美術・鑑賞の授業から中学生・高校生はそれぞれ何を学びとったか。
- ・ 中学生は高校生の、高校生は中学生の「自画像」を見て何を感じたか。

授業後の中学生と高校生の率直な言葉は、子どもたちがそこから何を学び取ったのか、かなり明確になるのではないか。また、今後の異校種間での連携のあり方に示唆を与えてくれるものと思われる。

4 実践事例

(1) 美術科設置校の文化祭「小中高合同作品展」への参加を通じた高校生との交流

夏休みの間に美術部の生徒で「自画像」の制作に取り組み、「小中高合同作品展」に出品した。部活動ではあるが、2学期の鑑賞（2年・水彩による自画像）の研究授業の事前の取組として位置づけた。美術部の生徒でも自画像は苦手に行っている生徒もあり、子どもたちにとっては模索しながら、手探りをしながらの自画像（素描）制作であった。鉛筆の扱いから始まり、あらためて素描の基礎に触れながら指導していったが、子どもたちはのめり込むように自画像のおもしろさを実感していったようで、描きながら自己の内面と向き合い、時に葛藤しながら作品を仕上げていった。中学生になって初めての自画像であったので表現には未熟なところもあったが、9月になって拠点校の文化祭「小中高合同作品展」に作品を出品した。数名の生徒が作品展へ足を運んだが、小学生、高校生と並んで展示された様々な自画像作品から、小学生から中学生への成長、歩みあるいは位置に気づくと共に、高校生の作品からはこれからの自分の表現の可能性（未来）あるいは目標を感じることができたようである。その後の2学期の自画像制作（水彩）および本校2年4組での「異校種間の連携の工夫」に関する研究授業（鑑賞）においても、作品展に出品した美術部生徒がたいへん意欲的に学習に臨んでいた。また、研究授業の機会に、放課後、出品した本校美術部生徒と高校生との交流の機会を持ったが、子どもたちからの感想では、授業の時とは違う「素描」の作品にも高校生からコメントをいただき、素描の魅力、表現の工夫の仕方、あらためて自画像のおもしろさに気がつかせてくれたと語ってくれた。

(2) 中学生と高校生とが連携して学び合う鑑賞授業を実践して 【資料1】参照

2年生で2学期に入って授業中に制作してきた水彩による自画像作品の鑑賞会を、拠点校美術科2年生6名をアシスタントティーチャーとして行うこととした。

初めに学級を3つの小グループに分け、11人の中学生小グループに高校生が2人ずつアシスタントティーチャーとして入るようにする。授業前に教師と高校生とで打ち合わせを行うものの、小グループではできるだけ高校生が主体となって進行してもらい、グループごとに鑑賞会を進めてもらった。

まず、中学生が一人ずつ自分の作品について工夫したところや作品への思いを

自由に語らせるところから始めた。自画像作品それ自体を目の前にして、いろいろな角度から鑑賞し合うのも一つの方法であるが、中学生であり自分の作品への思いがどう表現に結びついたかということをお互いに知ることも大切であると考え、まず制作者本人から語るところから始めた。そしてそれに対して、鑑賞者が感じたこと、気づいたこと、作品のよさやおもしろさ、工夫されているところなどを出していき、高校生からも、作品についてコメントをしてもらった。ほとんどの場合が制作者と鑑賞者、制作者と高校生との双方向のコミュニケーションにより、鑑賞を深めていくことができた。事前に作品を見ていないので、高校生にとっても中学生の作品に即座にコメントを入れるのは難しい作業と思っていたが、高校生がていねいにリードしてくれたので、その語りやすい雰囲気があって、中学生にとっては自己の内面によく触れながら自分の作品について語る事ができ、周りからもよく意見も出て作品の鑑賞を深めていくことができた。高校生は、そのような雰囲気の中で、自らの中学生時代における表現と自己について思い起こしながら、ある時は中学生と同じ目線から、そしてある時は高校生という先輩という立場からコメントしてくれたことが、中学生にとっては貴重な学びの機会となった。しかしながら、それはとりもなおさず、高校生にとっての学びでもあったわけで、作品を前に中学生にコメントすることが、高校生が今の自分の表現と自己について考えるきっかけともなっていた。

(3) 鑑賞授業後のアンケートの実施

授業後に、中学生と高校生がこの鑑賞の授業から何を学んだかを知るために、中学生と高校生に同じ項目でアンケートを実施した。この授業から何を学んだのかをできるだけ詳しく知るために、高校生には高校に戻ってから時間を取って記述してもらい、後日郵送していただいた。中学生にもすぐ翌日に時間を取って記述させた。また、中学生のアンケート結果は高校生に、中学生の結果は高校生に後日紹介した。(アンケートの結果については、資料として別添する)

5 分析と考察

今回の授業実践ならびに授業後のアンケートから、中学校と高校とが連携して授業を作り上げたことにより、普段の授業では経験することのできない学びが中学生と高校生の両者の中に生まれたと思われる。それは、一つには「自画像」という題材により、その鑑賞を通して自己の表現と成長とを語る事ができたからであり、二つめには、中学生と高校生とが鑑賞を通して語り合うことで、連携によりできた14歳から17歳という新たな年齢のくくり(それはある意味で中学校生活真っ盛りの「中学2年生」と、彼らにとって高校受験のその先にある「高校2年生」という、『生き方』における先輩との関係)の中で、自画像を通して自己をさらけ出し、見つめる事ができたからではないか。

アンケートの中に出てきた、自画像は、「個性を表すもの」、「ありのままの自分を描けば良い」、「自分の気持ちなどをよく見つめながら描くもの」などの中学生の言葉からは、高校生から、自画像を描くことを通して「自画像とは何か」を学び取り、自画像を描くことの楽しさに出会えたという結果であろう。高校生の、自画像では、

「絵を描くとき、描くものを見る目には素直な心が必要」、「自分自身と向き合う場という意識が足りていないのは私の方では」、「一人一人の個性というものは無意識のうちにも表に出てくるもの」、「絵に対する意欲や積極性は自分たちのそれとは違うもので、それぞれがそれぞれの思い思いの方向性に基づいて描いていたので、その姿勢は見習いたい」などの言葉からは、高校生が自画像について再認識し、中学生から、自分との向き合い方に気づかされたことがよく表れている。また、高校生からの話に「自分のいいところをたくさん見つけてくれた」、「少し自信がついた」、「ほめてくれて嬉しかった」、「一生懸命にほめてくれた」、「自分の工夫したところを高校生はちゃんと見てくれていた」などの中学生の言葉や、中学生との鑑賞を通して、「あのころ（中学生の頃）の自分にも同じようなきらきらした輝きを持っていたのかな、今の自分もまた違った美しさがあるのかもしれない」、「中学生の時に持っていた大切なものを置き忘れてしまったことに気づいた」、「中学生のコメントする立場に立って、自分が中学生の時には気がつかなかったものの見方、考え方の存在を感じた」などの高校生の言葉からは、自画像の鑑賞という出会いの中で、中学生と高校生に、改めて自己を掘り起こし、表現への意欲をかき立てる学びが成り立ったといえる。【資料2】参照

6 成果と課題

中学校と高校とで、いくつかの方法により、両者に学びが成立する連携の工夫による授業づくりが可能と思われるが、今回の「自画像」という課題は、幼少の頃から小・中・高校生、そして大人になるまで、自分と向き合い、描くことのできる共通の題材として、鑑賞の授業における連携の工夫を探る上で極めて有効であった。自画像の鑑賞の授業では、異年齢との交流を通して、子どもたちがお互いにものを見方を広げ、表現への意欲を高め、自己の表現と成長に気づくことができることも明らかになった。異年齢との交流から学ぶ授業では、鑑賞に限らず、今後も、この広げ、高め、気づくという視点での連携の工夫が重要ではないかと考える。子どもたちのものを見方を広げ、表現の意欲を高め、自己の表現と成長に気づく授業を、連携の工夫によって実現する。そして、中学生から高校生という新たな年齢のくくりの中で、普段では得られない学びを作り上げることが重要である。造形あるいは表現、鑑賞という行為は、順序立てて積み重ねられていく知識などとは異なり、今の自己が脈々とスパイラルに成長していくものであって、連携による異年齢との交流の中には、造形あるいは表現、鑑賞の行為を自己の成長の中に見出し、確認していこうとする学びが起こるものと考えられる。今回の授業実践から、異年齢、異校種間の交流による中学生から高校生への成長という軸の中に、造形あるいは表現、鑑賞の活動を展開していくことが、子どもたちに新たな学びを起こすことが確認できた。

今回の委嘱研究を機会に、小中の連携も含めて、今後も「異校種間の連携の工夫」による様々な図工・美術の授業をいろいろと模索、実践し、検証をしていきたいと思う。また、図工・美術の異校種間連携の機会が増え、造形活動における子どもたちの学びが広がり、深まっていくような教科経営を推進していきたい。

【資料 1】

「異校種間の連携の工夫（図画工作・美術）」に関する研究授業

（平成 20 年 10 月 29 日実施）

第 2 学年 4 組美術科学習指導案

平成 20 年 10 月 29 日（水）第 5 時

場 所 第 2 美術室

男子 16 名 女子 17 名 計 33 名

指導者 教諭

1 題材名

「自画像を描く・自分と向き合う」

2 題材について

（1）題材観

中学 2 年生というこの時期は、自己の内面に向き合い始める時期である。さまざまな体験を通して何かに自信を持つことができたその一方で、この時期は様々な悩みを抱え、時に自信を失うこともある。だから、自己の内面へと向かうエネルギーと同時に、自己をさらけ出して表現することへ距離を置く姿勢も見られる。自画像においても、鏡を見て自画像を描くことには躊躇や抵抗感もある。

自画像を数多く描いた画家ゴッホは、鏡に向かって自分を見つめながら、そこに自分以上の大きな世界を描き出した。自画像を描くということは、これまでずっと描くことにより自己の内面を掘り起こす人間の行為であった。今回の制作では、鏡を使って自分を見つめながら、自己の内面と向き合い、自分を描いていく。そのために、まず自分を掘り起こす作業から始める。自分を取り巻く生活、感情を振り返り、鏡に映った自分に対して思いを込め、表現を模索し楽しみながら平面としての絵に表していく楽しさを味わわせたい。

（2）地域や学校の実態

本校は鴻巣市の北部に位置し、赤見台第一、赤見台第二、箕田の 3 つの小学校より進学してくる。学校教育目標に「生命輝く赤中生」、そしてあいさつ・学習・体育祭・合唱・奉仕・花・部活動の 7 つの特色を持つ学校として「レインボー赤中」を掲げている。部活動もたいへん活発である。赤見台中学校区として 3 つの小学校と赤見台中学校との小中連携教育、地域との連携も深めており、小中教員の夏季合同研修も毎年続いている。学校周辺は住宅街で、保護者の方も、鴻巣市の出身より近隣からの転入の多い地域で、多くは県南地域や東京方面へ通勤している。また、学区北東部には花卉園芸農家もあり、鴻巣市の産業を支えている地域でもある。全体として、保護者の学校教育への関心も高く協力的であり、保護者ならびに地域の方により「赤中応援支隊」が組織され、学校行事や資源回収、

総合的な学習の時間等で学校の教育活動を支えていただいている。生徒の地域での活動も、全校での年1回の地域資源回収活動、学校周辺での3年生のマリーゴールド定植、2年生のパンジー定植など、先輩から後輩へと伝統的に受け継がれ、活発に行われている。

(3) 生徒観

全体的に穏やかで真面目な生徒が多く、協調性があるものの、やや積極性に欠ける。どの授業にも真剣に臨んでいる。美術の好きな生徒もいれば、苦手としている生徒もあり、表現技術には差も見られる。

担任としては、赤見台中学校に隣接する赤見台第一小学校で担任ではないがJプラン(埼玉県小中人事交流事業)で小学校5年、6年と関わってきた生徒が3分の1ほどおり、成長の様子を小学校の頃より見てきている。

3 研究主題との関連

県立総合教育センター「教科等で考える異校種間の連携の工夫」に関する調査研究の趣旨に基づき、赤見台中学校と県立芸術総合高等学校との作品ならびに生徒の交流により美術の授業を実施するものである。「自画像」という同じ題材で制作をし、高校生を交えて鑑賞の授業を行う。これに先立って、今年9月4、5日に実施された芸術総合高校の文化祭(四つ葉祭)「小中高合同作品展」に美術部7名の生徒が自画像を出品した。中学生から高校生という時期は、自分自身の内面に向き合おうとし始める時期であり、それは思春期と呼ばれる時期でもある。自画像を描くという中学生と高校生の共通体験をもとに、表現方法の技術的な差を超えて、描くことを通して自分を見つめることの意味や描かれた作品を鑑賞し受けとめた思いを交流させることの大切さを授業の中で学ばせていきたい。

4 指導計画

目 標

自分の内面を見つめながら自画像を描く楽しさを味わう。

作品の鑑賞を通して受けとめた思いを交流させることができる。

評価規準

自分の内面を見つめ、自画像を描くことを楽しもうとしている。

【関心・意欲・態度】

自分の内面を工夫して絵に表現しようとしている。

【発想・構想の能力】

表現の方法を工夫し、自分らしい表現ができる。

【創造的な技能】

作品から受けとめた思いを交流させることができる。

【鑑賞の能力】

指導計画

- (1) 自画像を描くことについて考え、自分自身を掘り起こしてみる。・・・1
- (2) 鏡を見ながら画用紙に鉛筆で下描きをする。・・・2
- (3) 自分の内面を見つめながら、表現を工夫し、着彩を進める。・・・2
- (4) お互いの生徒作品および高校生の自画像作品を鑑賞する。・・・1(本時6/6)

<p>展 開</p>	<p>学級全体での作品鑑賞 全体での作品鑑賞のねらいについて聞く。 それぞれ制作した生徒から、作品について話してもらおう。 生徒からの話を受け、それぞれの高校生（AT）から担当グループ以外の4点についてコメントしてもらおう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <ul style="list-style-type: none"> ・制作者から ・高校生（AT）から </div> <p>高校生（AT）の自画像を見せてもらい、作品についての話を聞く。 生徒作品、高校生（AT）作品を通じて、教師の話を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・進行は教師の方で行う。 ・学級全体で鑑賞し合う。 <p>自分のグループ以外の高校生からの作品へのコメントについても、しっかりと聞けるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生（AT）から、制作者への質問をしてもらっても良い。 <ul style="list-style-type: none"> ・高校生にも、制作時の気持ち、作品への思い、表現の方法などについてふれて話してもらおう。 ・高校生（AT）への感謝を含めて、自画像作品について話し、中学生の作品と高校生の作品を通じて、自己の成長と表現などについて触れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高校生の自画像作品 ・成長と表現に関する資料（幼児・小学生の描いた自画像）
<p>まとめ</p>	<p>本時の学習を振り返り、授業の感想を書く。 高校生（AT）からの話を聞く。 本時の学習について、教師がまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自画像を描くこと、表現することの楽しさなどに触れる。 ・高校生（AT）との交流を入れた授業の感想も書かせる。 ・高校生には授業後に同じ項目で感想を書いてもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・感想用紙（中学生向け、高校生向け）

【資料2】授業後の中学生・高校生からのアンケート

授業後のアンケートから（鴻巣市立赤見台中2年生）

1 高校生と鑑賞の学習の機会を持って、あなたが今日学んだことは何ですか。

- ・自分が描いた自画像に対して、コメントを言ってくれたり、ほめたりしてくれて嬉しかった。自画像を描くときは、自分と向き合って自分の好きなところを描くことが大事であると学びました。
- ・高校生の方は、自分のいいところをたくさん見つけてくださいました。自画像を描いて良かったと思いました。他の人の作品のいいところを見つけることも、高校生に見習いたいと思いました。
- ・高校生のわかりやすい説明で友だちの作品の良さにも気づきました。
- ・僕はとても絵が苦手だけれど、高校生の方のアドバイスをもらったら、少し自信ができました。これからも今日の経験を大切にしたいと思います。
- ・高校生は絵の工夫や特徴をすぐに見つけていてすごいと思いました。
- ・自画像には自分の気持ちが表れるのだということがあらためてわかりました。自分の自画像に対する考えが変わりました。
- ・高校生の人たちとの交流で、自分で描いた絵が評価されて恥ずかしかったけれど、とても勉強になって良かったです。鑑賞の仕方の勉強にもなりました。
- ・とても良い鑑賞会でした。高校生の話を聞いて、中学生もみんなよく頑張っていたのだということもわかりました。
- ・高校生のアドバイスがわかりやすかったので、他人から自分の作品がどう見られ、どう思われているかがよくわかりました。
- ・自画像というのは、自分の顔をそのまま描くのではなく、自分の個性を表すものであることに気づきました。
- ・高校生からいろいろとアドバイスをもらったり、感想を言ってもらったりして、工夫の仕方などがよくわかりました。
- ・すごい美術センスを持った先輩から、優しい言葉をかけてもらい、すぐに名前を覚えてもらい嬉しかったです。
- ・細かいところまで鑑賞してくださって、注意をして描くことの大切さなど教えていただきました。絵はあまり好きではないけれども、色を工夫することのおもしろさを感じました。
- ・いろいろなことを優しく教えてくれてとても良かったです。
- ・あまり自分に似せようとするのではなく、ありのままの自分を描けば自然に自分に見えてくるのがわかりました。
- ・高校生の方はぱっと感想が言えて、すごいと思いました。短い時間なのに、ちゃんと作品を見て感想を言えるのはびっくりしました。
- ・自分の絵はとても下手だと思うのに、一生懸命にほめてくれてとても優しいと思いました。嬉しかったです。絵を鑑賞することが大切で、とても楽しいということがわかりました。
- ・自分の自画像はうまくないけれども、ありのままの自分を描けば良いことを学びま

した。

- ・ 人それぞれ気に入るところや感じるものが違うけれども、作品の感じ方はいろいろあるのだと思いました。高校生の方に作品の見方を教わった感じがします。
- ・ 「自分らしさは出そうとしなくても出るもの」と高校生の方がおっしゃった一言が一番勉強になりました。
- ・ 美術にとっても詳しいとともに、アドバイスがとても優しいので嬉しかったです。
- ・ 自分が工夫したところを高校生の方はちゃんと見てくれていたことが、とても嬉しかったです。自画像というのはただ描くだけでなく、自分の気持ちなどをよく見つめながら描くものだと思います。
- ・ 自画像には一人一人の個性が出ていて、自画像もたまにはいいなあと思いました。表情や格好などでその人が何をしているのかがわかりました。自画像の見方を高校生に教えてもらいました。
- ・ 高校生に言われて、自画像に自分がよく出ていることがわかりました。
- ・ 高校生の話を聞いて、自分の絵がどういうふうに見えるのかがよくわかりました。自分の絵の見え方のようなものを教わりました。
- ・ 僕も努力してがんばればうまくなれるような気がしました。これからはがんばって描いたり、つくっていきたいと思いました。

2 高校生の「自画像」を見て、感じたことは何ですか。

- ・ その人の動作や感情が表れていてすごいと思いました。見た瞬間に表情が感じられました。陰影がしっかりと描かれていてびっくりしました。
- ・ 見たままを描くことと想像をふくらませて描くことが同時に、しかも自然な感じで行われていると思いました。私もあのような作品を描けるようになりたいと思いました。
- ・ 笑っている、泣いている、怒っているだけではなく、表情のないような顔でも、何を思っているかが伝わってくる作品ばかりでした。
- ・ 写真のようなリアルさがあってびっくりしました。表情も豊かでいろいろなのはびっくりしました。
- ・ 陰の描き方、明暗などがとても上手でびっくりしました。
- ・ どの自画像もうまいだけでなく、よく気持ちが表れていると思いました。
- ・ どの自画像にも描く人の思いがよくこめられていると思いました。
- ・ まるで、本当に生きているような自画像ですごくきれいでした。私も高校生になったら、あのような絵を描いてみたいと思いました。
- ・ 高校生の先輩の絵は、専門的に勉強しているだけあって、やっぱり違うと思いました。描いたその人の気持ちが良く伝わってくる作品ばかりでした。
- ・ 絵の中にいかに自分の心を注げるかが大事だと思いました。心がこもった絵は人に感動を与えるのだということがわかりました。
- ・ 鉛筆で描いたとは思えないほど、濃淡、明暗がしっかりと描かれていて迫力がありました。
- ・ 自分の個性を表しつつ、自分の顔ともしっかりと向き合っているのがすごいと思

ました。

- ・写真で撮ったかのような感じで、とてもリアルでした。あのような絵を描くのどのくらいの時間がかかるのだろうかと思いました。
- ・鉛筆だけであれだけ立体感が描けるのはとてもびっくりしました。
- ・陰影、明暗がしっかりと描かれていて、一つ一つがとてもいい感じで細かく描かれ、立体感がよく出ていました。
- ・構図から髪の毛の描き方まで細かく表現してあってびっくりしました。感動しました。
- ・中学生とは表現の技術に全然レベルの違いがあると思いました。
- ・顔や姿だけでなく、背景などもとてもすばらしいと思いました。
- ・鉛筆だけなのに、濃さや明暗をしっかりと描き出していて、絵によく表情が出ていました。
- ・細かいところまでいい感じで描いていてびっくりしました。
- ・一人一人の自画像の感じは違ったけれど、作者のいろいろな性格や表情がよく出ていました。
- ・専門的に美術を勉強している方々とはいえ、私たちとあまり年の変わらない人が描いたということに驚きました。
- ・自画像を描くとき、見る角度を変えているところにびっくりしました。
- ・高校生のレベルの高さにびっくりしました。私もいつかあのような表現の技術を身につけたいとうらやましく思いました。
- ・無理に描こうとせずに、自分のありのままの姿を描いていてすごく上手でした。鉛筆で陰影などを描いてあって良かったです。
- ・絵がうますぎて、僕たちとの差を感じてしまったけれども、高校生の人柄もよく伝わってきました。
- ・自画像の作者の顔を僕は見ていないのに、その人の顔の想像が付き、びっくりしました。

授業後のアンケートから（県立芸術総合高校美術科2年生）

1 中学生と鑑賞の学習の機会を持って、あなたが今日学んだことは何ですか。

- ・普段先生の話の話を聞いているだけでは気づかないこと、自分たちがコメントを言う立場になって初めて、言葉の大切さや考慮しなければいけないこととかが目の前に現れたようです。自分が中学生の時には気がつかなかったものの見方、考え方が存在するように感じました。
- ・素直な心です。技術ももちろん大事ですが、素直な心がなければ表現したいものもできないと思います。絵を描くとき、描くものを見る目は、素直な心が必要なのだと思いました。とても勉強になりました。ありがとうございました。
- ・絵を描くのはとても自由なことだとあらためて思いました。絵を描くことは楽しいだけじゃない、考えることも悩むことも必要。でも、それだけでなく、ちゃんと楽しく嬉しいものであったと教わりました。「中学生って、それだけで強い」と、聞いただけでピンとこなかった言葉の意味もわかりました。とても皆が美しく、きらきらして見えて、あのころの自分も同じような輝きを持っていたのかなと、今の

自分もまた違った美しさがあるのかもしれないと、考えさせられました。

- ・自分とは何か、高校生になって得たものは多いですが、今回の授業を通し、今となっては中学生の時に持っていた大切なものを置き忘れて来てしまったことに気づきました。純粋に、素直にすることで一番自分らしさが出るのだ。今の私は、高校生活の忙しさの中のいろいろなことで混沌としていました。けれども、この機会に「嘘のない自分」が一番輝いていたのだということを思い出せました。
- ・中学生と高校生では大きく違うものがあるということと、これはどちらも変わらないということの二つがあった。まず、後者について、自分も含め、やはり意見や考えていることを発言することが苦手な人が多いように感じた。これは鑑賞に限らず、全体に及んでいるように思うので、変わっていかなくてはならない。一方、絵に対する意欲や積極性は自分たちのそれとは違うもので、それぞれがそれぞれの思い思いの方向性に基づいて描いていたので、その姿勢は見習いたい。
- ・始めに思っていた「中学生の美術の授業」のイメージとは全く違い、みんな何らかの形で美術を楽しんでいることがわかって嬉しかった。他人の作品についての発言では、なぜか技法についてのことが多かったけれども、もっと「本人の性格が出ている」とかいうことも言ってほしかった気がする。授業をしていると、一人一人が「この後の部活のこと」、「家に帰ってからすること」などいろいろなことを考えているような目の輝きを感じた。美術をやるとき、ただ紙に向かっているだけではいけないとあらためて実感した。

2 中学生の「自画像」を見て、感じたことは何ですか。

- ・昔も今も私の頭の中では想像できないような絵がたくさんあったこと。動きのある絵ってなかなか描けるものでもないし、さみしいからと友だちと一緒に絵にした生徒もいました。考え方が自由だとか、一人一人違ってそれはそれでとてもおもしろいとか、それは絵の具の効果も大きかったのでしょうか。色って、人を楽しませてくれる何かがある、どんな色にもあるのかもしれない。
- ・自画像を描くにあたって、躊躇したりしがちなのに、皆進んで手を入れていたんだなという感じが見られました。自分なりに工夫したり、画面に手を入れたりしていて、絵を描くのも楽しんでいるようでした。
- ・自分が表現できないよさがこんなにもあるのかと目からウロコでした。忘れていた技術ではないものを思い出すことができました。技術というよりは、いかに自分と見つめ合うかをちゃんと考えていて、驚きました。似ている・似ていないにとらわれて、自画像を自分自身と向き合う場という意識が足りていないのは、私の方ではないかと感じました。中学生にしか出せない元気の良さを間近で感じることができ、私の方がたくさん贈り物を貰ってしまいました。本当はスムーズに進まないかもと不安な気持ちもあったのですが、皆本当に協力してくださって、逆にこちらが助けられてしまいました。一人一人の個性というものは、無意識のうちにも表に出てくるものだと感じました。言葉では知っているだけだったものが、こういうものなのかと気づかせてもらいました。その魅力をずっと持ち続けてほしいと思いました。まだまだ書きたいことはたくさんあるのですが、自分の中ではうまく言葉にできま

せん。今回はこんなにすてきな体験をさせていただき、本当にありがとうございました！！

- ・ コーティングされた自分ではなく、ありのままの自分が伝わってくる素敵な作品ばかりです。あらためて歳をとると忘れてしまうことが多いのだと思いました。歳を重ねるごとに自分を騙すことがうまくなる。中学生の自画像から感じるのは、ただ一途に自分と向き合う姿勢でした。過ぎていく時間の中で、大切なことだけは忘れないでほしいと思いました。
- ・ 皆がそれぞれ枠にとらわれることなく自由に描いた雰囲気強く、またそれがうらやましく感じられた。意識した・しないにかかわらず、自分の考えていたり、思っていることが素直に出ていて、縛られない自由というものを持っている気がした。
- ・ 本当に不思議で、本人たちが意識をしていなくても、筆の使い方や色使いで、本人そのものの個性が出ていて驚いた。個性は、出そうと思って出るものではなく、自然に滲み出るものだ気づいた。最初、「何となく顔だけを描いた」という作品がたくさん出てくると思ったが、みんなそれぞれが自分の好きなものや自分のイメージを考えて作品に仕上げられていて感動した！！